



阿松海上新話

外題周延茶

2688
3

2688
2

2688
1





外題周延素

前編上

2688
1



我假名垣魯文新聞第五百四十號客歲十二月十日
 て雑報欄内に記載せし鳥追阿松の傳を間々本年一月十
 一日第五百六十二號みどり副出さる事十四回未だ結局
 み及いざるも倥倥にして千町万町の衆目み觸れ喝采の
 声價を得る操觚者の歡喜の餘りみ思ふ筆と走る
 あり然りと雖も春霞三筋を撃ぐ長物語ハ頗る新紙の本
 意に違へを其概略を次號み掲げ大團圓とあさんと欲
 と錦榮堂の主人遺憾として乞ふて其首尾を全くと
 ち原由の遙くに過去明治元年の春よりして同十年の
 冬み止る温故知新の大実録題して海上新話と號け茲み
 三絃の緒と解くと云

明治十一年第一月

假名垣魯文記





陸
オ公

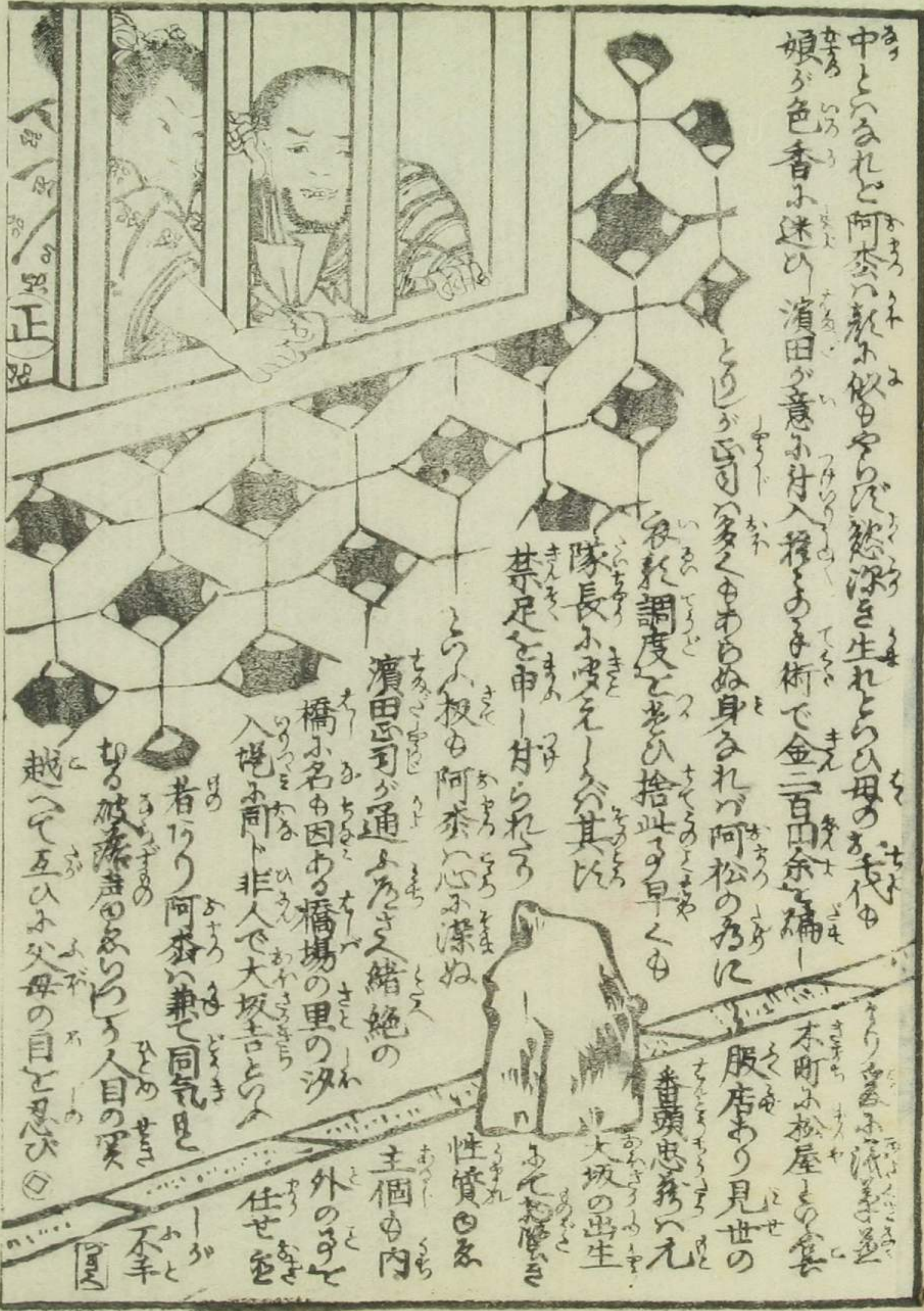


鳥追阿松海上新話初編上之巻

第一回

假名垣魯文閱
久保田彦作著

梅が香や乞食の家も覗くと晋子の吟の古き林も新なる代の春立頃
 東京の未だ江戸と云び木挽町の采女が奈小羽生の孤屋の板庇し月洩軒の破
 損家小親子の非入あり其本夫定五郎八日毎小辺りをとき尾張町ある布袋
 屋とのくる呉服店の曲り門小履物直一の露店と張り妻のか千代(四十二)
 と一女阿松の春の夕返平常の女太夫の笠深く包めど白ふ島田留世の上を
 ニッニッ超ど花香の市中小高く大店向や危着を底の窓下あて雀賀の夜も
 仇めまて玉と欺むく母娘其以世上小屋久米三と人も門より浮子を流す
 も羨ま末のよりあて維新の際も多満満の兵隊大名小路小屯管してあつ
 血腥さの時あまの女太夫と窓下小を付て種くの唄るど謡りせ浮と潮みお
 阿松母子の日小二四の稼ぎいかさきと又あまきつとがひい果報の海も



中といふれど阿茶の顔も似やうに然深き生れとらひ母の衣代ゆ
 娘が色香小迷ひ濱田が意小付入程の術で金二百山余を編一
 としが正司の多くもわぬ身なれば阿松の乃に
 夜敷調度と老ひ捨此より早くも
 隊長小波えし其以
 禁足を申し甘られらう
 一人板も阿茶の心不潔ぬ
 濱田が通ふべき緒絶の
 橋小名も因ある橋場の里の汐
 入地小前ト非人で大坂吉との人
 者りり阿茶の兼て同気見
 切る破漆のあらう人目の笑
 越つて互ひ父母の目と思ひ

正司の者ありが
 深く此阿松で
 意慕ひ情を
 と求めん米女
 が糸の定五郎が小家へ尋ね
 けき金ありくたむを竟おらうるま

度々密會せしこと母の
 代悟りし素より
 色は俗業の助けと我
 子お若
 兼知で
 乃と
 りぬ
 子お若
 兼知で
 乃と
 りぬ



正司の者ありが
 深く此阿松で
 意慕ひ情を
 と求めん米女
 が糸の定五郎が小家へ尋ね
 けき金ありくたむを竟おらうるま

度々密會せしこと母の
 代悟りし素より
 色は俗業の助けと我
 子お若
 兼知で
 乃と
 りぬ
 子お若
 兼知で
 乃と
 りぬ

度々密會せしこと母の
 代悟りし素より
 色は俗業の助けと我
 子お若
 兼知で
 乃と
 りぬ
 子お若
 兼知で
 乃と
 りぬ

度々密會せしこと母の
 代悟りし素より
 色は俗業の助けと我
 子お若
 兼知で
 乃と
 りぬ
 子お若
 兼知で
 乃と
 りぬ

阿松の門へ来て調子よ
 忠孝の目々
 阿松の門へ来て調子よ
 兼三筋の糸糸並の内々
 覗く仇の姿ふん惚けん
 涙でも覚ても忘れ兼
 思ひの丈と文お惚め
 或日阿松が袂へ入
 とく何するんを

正

浮足
 小入谷
 田甫と

其の日の夕暮
 間をきき
 或家お忍
 びの首
 尾の荷
 と内入れバ
 阿松への
 姿と粧ひ
 酒有さ
 仕度と
 いとあり
 ぐらに

浮足
 小入谷
 田甫と

其の日の夕暮
 間をきき
 或家お忍
 びの首
 尾の荷
 と内入れバ
 阿松への
 姿と粧ひ
 酒有さ
 仕度と
 いとあり
 ぐらに

阿松の門へ来て調子よ
 忠孝の目々
 阿松の門へ来て調子よ
 兼三筋の糸糸並の内々
 覗く仇の姿ふん惚けん
 涙でも覚ても忘れ兼
 思ひの丈と文お惚め
 或日阿松が袂へ入
 とく何するんを

正

浮足
 小入谷
 田甫と

其の日の夕暮
 間をきき
 或家お忍
 びの首
 尾の荷
 と内入れバ
 阿松への
 姿と粧ひ
 酒有さ
 仕度と
 いとあり
 ぐらに

可
大
二

阿
松

四



ねよとの鐘の延屏風破れ栞園
 枕の並へ怪しき夏の仇むまび
 後の憂とぞわかれをるを
 非人小屋初めて泊りこと
 りひ若や人ふ悟らまこと我
 身の恥と故少の眠もはら松の
 宵ふとせし酒ふすや、床
 入る真夜中ころ表の掃りゆ
 勝ちわりの我が家の雨扉
 足で蹴之椽先小定を掛
 る大坂吉の出又庵丁と口小寛
 突然屏風と取退けて

松
 四ッふさる覚
 初と忠藏
 ぬ密夫
 松が襟袋掴んで

又右不
 引拵庵
 逆手不
 胸元へ
 賭博どお家
 業もせは其日
 の煙りも立
 て子別業の新内
 ぐ人様のお門立
 一清二法の子

既不利んとする
 手不廻り涙と
 共不声ふり
 今更か前の息
 掠め忠
 義さを
 不美とあて
 のの壁言ひ
 終殺され
 て由言解
 とるあひるあから
 卑し産れよ一度
 素人元と枕をる



吉
 既不利んとする
 手不廻り涙と
 共不声ふり
 今更か前の息
 掠め忠
 義さを
 不美とあて
 のの壁言ひ
 終殺され
 て由言解
 とるあひるあから
 卑し産れよ一度
 素人元と枕をる

呉服反物

浅草並木町

金松直也



身の内で
漸々多き瘦
世帯回し五穀
もは
人間不産れても
穢多よ乞食と卑

松屋本店

日いろく小徳ま由
虚々実情ハ人の命
の山吹色手切の金
と結び小千代と
おせぬ涙と
浮きおれお
百田の金と
かゝる金乞ひハ
安いのぞ
と胸
ぐらふ
銀引とせぬ
板屋月

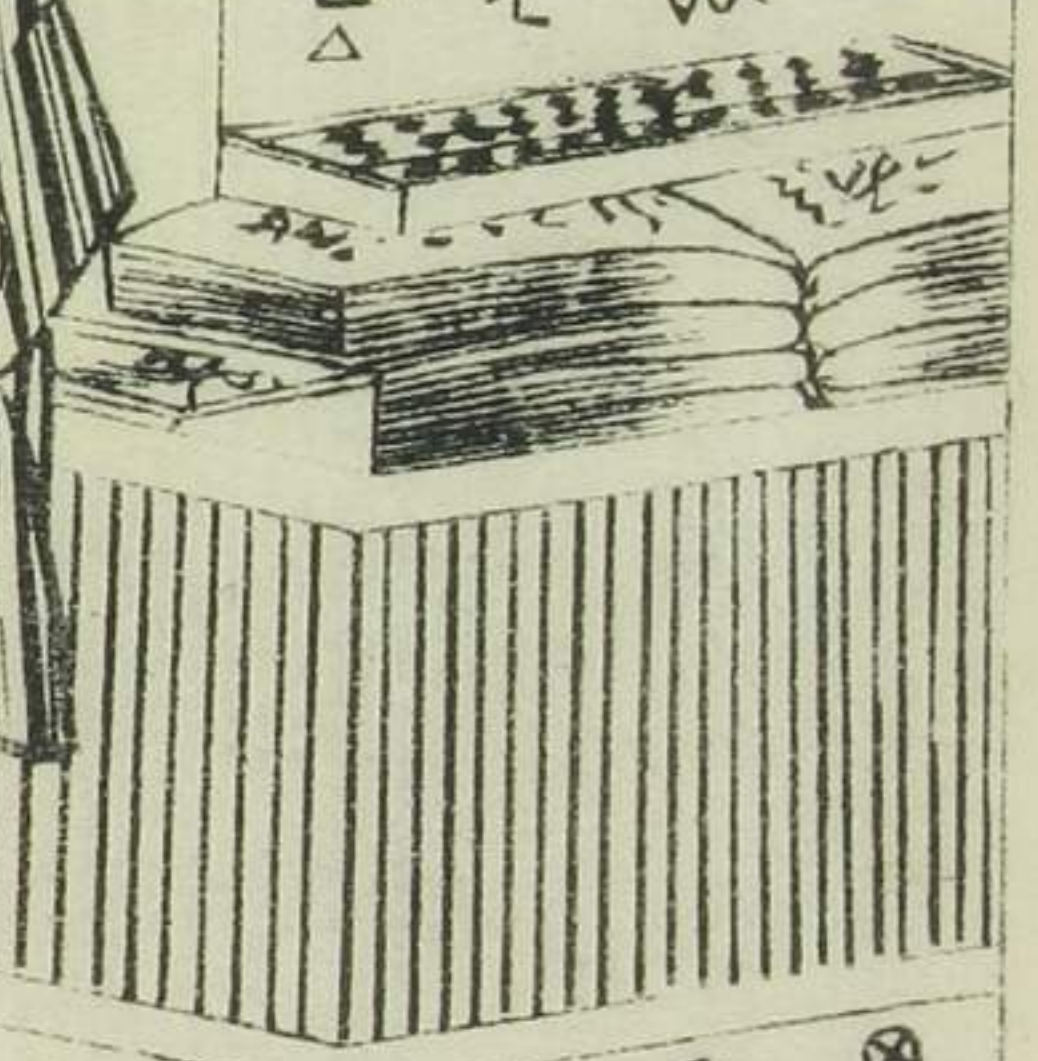
一めらま珠小邪見の
前少いふく愛あか
夕夕竟知りあふく
さんとめい小中も
罪ハ私と體と突付
ササのむらと殺
てと阿松が覚れ小流石の
吉も張切腕ひるじり
後ろの荒壁のあま
まのて吉小向ひ
羞小羞見一心地
お千代小此場の扱
内證の親娘二人の水



さ登る主個より預り
命の換給一と心
みれば代が切の
とを渡して虎の尾
の口と退れん地
抜て花びさ秋雨
あまの湯一羽
時と故おて
タリ〇改小三人
まの「土口さん
上出来と阿茶
由座下を廻へ
元々仕組ど又
可

水揚帳
金銀通帳

三昧既での上ふ
血とんねばあふぬ
地へ後うら留て
さすのいふを△



命替りの二番
判で耳と
拵へ此百
田とのふ傍うらあ代い
り笑う柄の小柄と七一廉の役小仕
つて腕とさうとさめて目尻の目と
思んで遠うら乳保合もんて見ぬかりの税の悲

忠
其の東京と久し江戸を更なるらま
百事維新の御新政小民の困苦を
救せられと有秘さの代るが慶
かゆ表のあきりく殊よ
風小吹き
送りて何
軒端の柳
時い星明治一年如月
小送る旅路の門出成
全膏が別れごとかこも
るが浪花津ふさや
案トら猶記不深

首尾よくつて百山久谷田甫のニッモウ観音の
明七ツ大層きさの吹曲を風と凌ぐら茶碗の
酒と三人廻る逆見くつたわ行ぬ身の果ハ
後中ぞもひ白玉の赤由わりて裏とあり
夜のどくどくありふるる○此後松大
坂吉の善らぬやのこ色ふことよせ様
悪計と廻らして先小後田西司とのい
今又ね及の老翁と密夫ありとのいあて
金白田と編りとのいエつふよ其筋へ聴へ
う日あふ彼者の身ふ及んと思まらぬ
堅とた千代娘おと大坂吉の二人に一度姿を
隠させ二年の其内上戸が古郷の大坂へ密小身とあせ入るさび
世のの口碑と遊る小如ととれ子と膝と突合島ふりて身の上を



古と悪事の為ふ世と狭めくる大坂
吉と彼者退の形松の二人の其身
の星りふ香が鳴く
東まて認ふ紙は
沫へ旅粧及び由
そく小松屋の
後代老翁より
奪の金で
路用とて密出
古菓と抜ゆま品
川と外れて身の廻り
を由調へばと古半縁
ふ古布る約由

可
二

三筋の命
毛の髪は
よれた三尺
食色心
手拭ひ小敷
強せと身小ら
悪漢毒婦が
首途と

千里の
蕨小
猛虎と放を彼諺の
秘るらん其日の黄昏灯と由ひ小
岳川秋の裏まるる東海禅ちの
境内小兼て知己の非人仲間小安次郎と
の者あり阿茶が父定五郎とい付馬の友
とて義兄弟の因とて縁の縁合れバ
二人を爰ふ今宵とあつー
旅の用意の調へを
いと靴母くさひや大坂
吉の平常より安次郎が酒と好
め僅るからの手去る松の



備前徳利の樽酒小身のひ色ひ
竹の皮煮染めのみを買とくの元
安次郎の門口より細目小
あけて内て
伺ひ

葉越一の
毎ると



母さんの言付の松の
か秋夜女賢く牛
賣換ふたはゆられど
のの私
り

仲間同士の
賭博不負債も
来女が原の娘は
いと主人振え
底氣味悪く小
小あつて扱ひ
兼て活し
おつてあつて
出で珠は
吉原どのに
来女が原の娘は
いと主人振え
底氣味悪く小
小あつて扱ひ
兼て活し
おつてあつて



和漢書籍
東錦繪
問屋
古板御福

編輯 文保田彦作
東京第天正五小區通二丁目十九番地
大倉孫兵衛

田舎源氏五十四条	二帖	東よりきつり年画帖志あり
大日本物産圖會	五帖	大系後画年草志あり
能優三十六花撰	一帖	千代紙歌子口流画あり
東京開化卅六景	一帖	享和しし新物志あり
小葦入門彩色八	一帖	浮銀酒油の流画志あり
尺寸珍本	一帖	諸流畫古中し志あり
魔児真寶記一夕話	三冊	重札目錄も掛あり
鳥連於雲海上新話	三冊	百人一首并話あり
古今名婦傳	一帖	東京新圖号第小園あり



仇抱とあること共
物語ひと先吉が古くへ身と
落つけんと
逐一小安次郎
小流せと
一々安て打
うみつき一互ひ小
心打解て
悪いことあり
隠し合ふが日ひの
よみと此とを
人の心の奥の
るへと主個ハ

先小案内
九入るや月渡り
板尻
安次郎
如何なる
とを仕出
するそん次の
巻小解
分巻





へ14
2688
2

へ14
2688
2



あつた
あつた
あつた

トヨリイ
ツテヨメ
ヨロツヤメ

あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた



再説東海寺の

暮六ツ袖

浦の波小窓

さ歩行

新荷

の又

客の
又妓橋小碑

申三絃の音由

是をて風吹送る穉と佳有殊味と
別別の酒をさるを栲酒と佳利小うのま

熱煎小豆毛蚕碗の
堀豆腐元より阿
松小吉蔵由欣は
小碑由まのり月の四非
料由お忘れ

阿奈の
手馴三絃の
調子由涼と三
下り吉の七客と
手枕お

数る清も七ッ五更ふをこ
 朧ろ月流石お松の生れ古郷を
 今宵旅路へをい出さるの帰
 り来ん高砂の松お甲斐あるに
 日影の身せめて今夜は家へ
 とりの小主個の安に毎由傍
 より泊れと進むる後りお
 船の友松お継りておるま
 錠縄酒も飲よく飲を破れ
 て折まど隔の襖夜るの物と
 跡とどつと見定めて安に毎々
 門口の掃りと壁く後しつおるま



お松

忠
 小兵隊ハ
 安梅差又
 或ハ六尺持

つなぐ儀侍と片頬ふ笑表の方へ
 ゆく後おのまき月影もさやけき海不
 清も入て星のまのく漁舟火お終えお中の
 れをとおれお此家の安に毎々
 取締おの分骨密お注進ある
 日影お松お若お針おの捕亡まお
 得お持えて裏表よりお肩おお入



燕一枕の二入の襖後
 布巻と手おく加退を雨
 第何て度の方へおのの

吉と目
 者退すかと
 下して
 日向の





河

日

叔の彼ハ月と

喰ハ表の方へ退れり

三名の兵隊の等し

彼突梅を極む

樹の石と突れて阿

松の傍らに身をひる

グして逃んとす

木の葉に揺れて

時の鳥の羽

考の如く

此方ハ

お松がめくあまをわづらふは

兵隊附りて既小危うき其中

小ゆえより大膽不敵の毒婦自

然小儀のりふ業小まるとこ

圃とのそ中て危危の如く

逃り後ろ小むと然

つくと振拂つて情あ

柳の枝小花付て身

おどして幹を傷

花より表小花

下んて

柳の糸筋ハ

風小のち

風小のち



阿

三

何の道に極

影の森が小亀

今までハ晴一空

あはくはあけた月

夜に照さるるを

暗の梅が香匂ふらんお松は是れ

猶うつらうつらと語りて討手の兵隊

高き小手に繩をけり大坂吉とが之の柱小結へ

得らうと必し尚

突かざるも縁の梅

一生

お松の

彼処に

あはれ武ひと

と避けて

左右小糸

手先と退れ

晴て白昼小

下

松

松

松

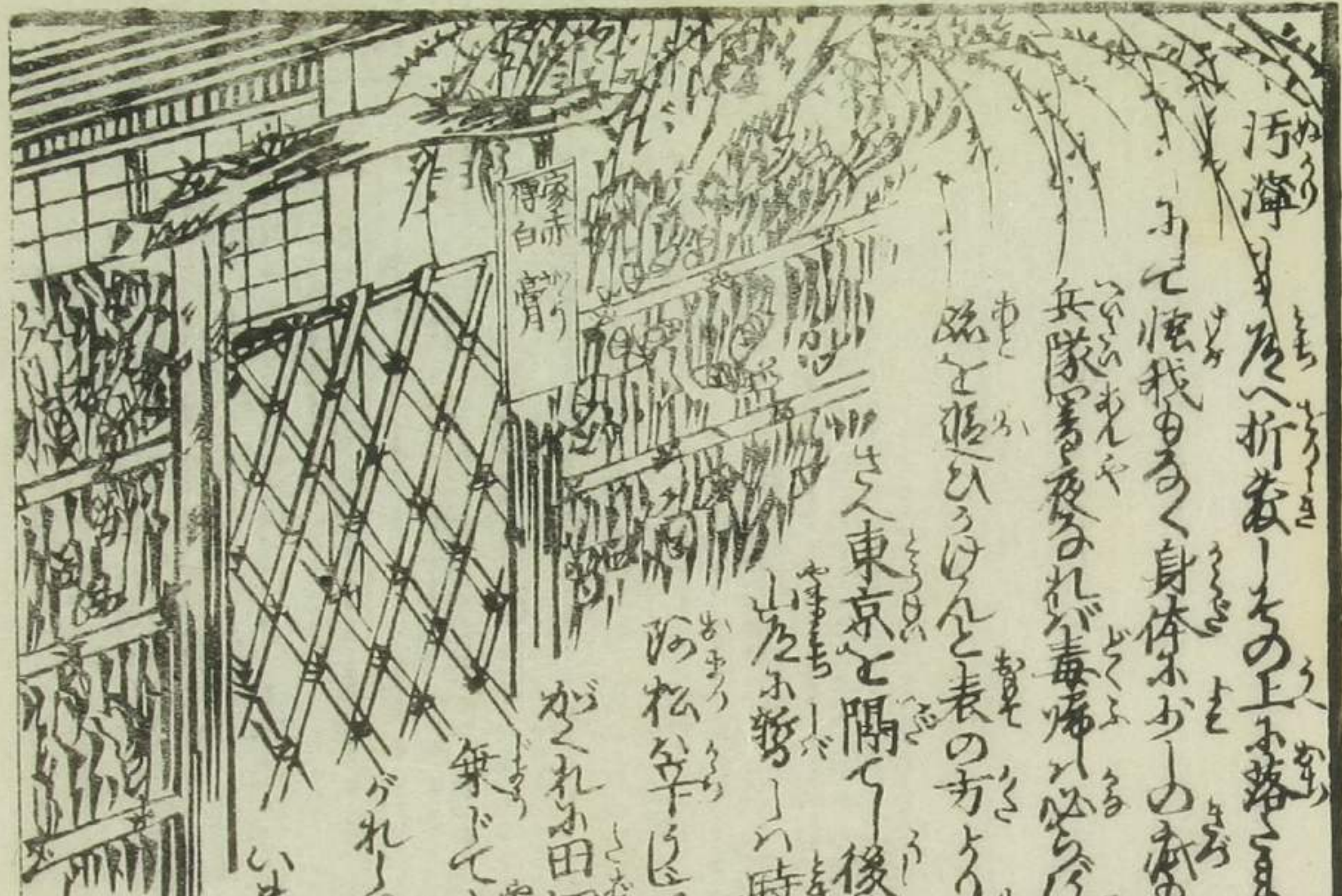
松

松

松

凡情ありしが兵隊元い詰りてあ松が裳袴小なりつらんと
 りんを拵ひて枝より枝へ自由自在ふらち登る
 さあぐ真珠の梢へと渡るよ
 さも似たりお松又りや
 雲のぞ照る月れ
 と隠しけまはあ
 松の裳をと隔
 てのほの枝小
 その名と小
 箱ととせ
 つく幹ととせ
 身由極くと裏手の暗
 及運よくも去年をいれ 松箱の古葉を

△籠申其名の七重八重
 そのま柱らふ縁がれが
 兵隊の
 の
 面々ハ
 たん
 阿松ら
 取込
 こも目さ
 さいはる
 吉原の
 吉原の
 吉原の
 吉原の



汚浄も及折衣一その上お落さむ幸ひ
 ありて懐我のゆく身体お少のあなけはと此処の
 兵隊着夜なれが毒癖は必らに近延ん夫れ
 必と張ひくひんと表の方より畔道ふ早隙
 入東京と隔て後ろの天の社おつぐ
 いたお勢一の時を移せし由その則が
 阿松卒して入るき森の樹のる
 がこれお田畑のたのきくひるくはる
 兼て山崎ひ小虎を虎口とまぬ
 ぐれし思運るが天命の
 いまこそその処のふり
 らくも真ひとつせ
 ○そまのぬを捕縛と
 るに被吉原いすの△
 大坂上り△

横目小くけ怒りの

声分とそそぐ

やあふ安家

と足あて踏と

如何小金がわいの

とのりもッ仲間

の小屋をれ登へ

悪みてお縄おかり運累

せつ々夫先も且結んご善見身

成不ど已去縁もあ他人であらうが

お松お父定五郎の好身もあるふ僅う

る金小目ごまて人を呪々穴ふら

是れうう已れが地獄へ移さ

四見もいせさ

有様お妻次郎ハ

身と着り一云

句もおれとそたぶくと着るを指さ

吉の左右とえ返りて一今さらあな愚

智といふ所相曳れあ、小唄と

定め一未練な奴と云ふ人もお

此上の公のみは、いざお下され

眼ととあておんぬい流石あやの

沖と越へ一大膽不敵と知られ

兵隊の苦あを縄付のま、引きて

安次郎あい遊て五沙汰と合図の

お小勢と集め意気揚々と帰りの



河清の基が死ん

野暮みやう

生るり死ん

てのよと

此後大坂吉の縄付のま、市政裁判所へ護送

たより段々と五吟味あ

不敵の

度くの

持問の

更小旁

白状

あ、由想

終ふ

白状

終ふ

よく肝膽へ取

つけ

居ろと締め付る眼の逆づり

七八月の間と案内ありしが
 其の御新政の折は
 大して中ら
 民に仁政と
 施さるる
 積年幕政
 小苦しめられ
 民の疾苦と
 救りせらるる
 刑法と云々
 くらぬ政の際
 あるは此書



罪あるは身あり
 傾む
 罪ありて
 罪ありて
 罪ありて

の罪悪も二の
 編りあり
 めの人を殺せしといふ
 又盗賊といふも非は
 是と長年の年月と獄屋に
 送りしとされ其罪
 至つて種さといふ
 翌年の一月ごろ
 吉原の虎の窟
 傍の罪科と格り
 一年の徒罪と申
 つけらるる彼伊豆
 七島の内の内なる三宅



△島よ死せらるる波
 風暴き岩根の松よ犯せる罪の口

軒の
 夕汐小故の
 空の
 米の
 粟稗
 或ひ
 海草まつた
 命の
 夜
 耳ふつと藤
 られぬまふ



文乃小長情胸小夷く仇
 惚小勝笑の寿
 今百集由

いとに新らうと懐中して安業
 門の如く揚揚るる縁は私ちの汝
 入魂の羽生の小家へ思ひの如
 一ノ兼て阿松の如て
 さまへ色のん意
 せが

その夜阿松と互
 の外小お蔭の
 世に越屏風小松とるる人



阿松のよみとどろひ
 中して千鳥啼く死西の
 月と詠在らうと
 ○却つて爰小説ゆまの
 折云ひへ洩ぬ浅草の
 観世音小松をささ彼並
 木町の松屋の氏代自前のお務め
 日毎小門へ阿松母娘が新内布の此糸蘭保結る

知とほ送り不舌とい
 りらぬ阿松を返す小意の空と懐
 ちて主個が渡せ二百四と橋町の
 何某へ仕切不渡せと云付られ

短うた浪世と
 懐りて由
 阿松が染こ
 小貼りた身
 と由厭れどそ
 必ひ絶え
 玉をて人



大坂吉が 密夫
 害ひ母の 災
 百田と切小そ奪道が
 かるいせなある家五夜め
 とも面いせある小況てやま
 害ひ母の 災
 百田と切小そ奪道が
 かるいせなある家五夜め
 とも面いせある小況てやま
 害ひ母の 災
 百田と切小そ奪道が
 かるいせなある家五夜め
 とも面いせある小況てやま



ある身とも知らん妻と装
 お身のあまあり小あ後のとも
 思つてそをかまひの
 のすみく白田と後
 やり辛く其場へ連
 れ七の二百田の其内
 中央不足せるとされ
 をましく主家へ
 主戻られしとのて
 ありとどか
 有しとどか
 打ちあけて
 如何せんといふ
 如何せんといふ
 如何せんといふ



田舎源氏五十四条

大日本物産圖會

能後三十六花撰

東京開化卅六景

小學入門彩色入

尺寸珍本

鹿兒島實記一夕話

鳥追長衣海上新話前

尺寸後篇

古今名婦傳

二帖 東京の風景年画帖志

五帖 大正後画手集志

一帖 千代紙敷子口巻画

一帖 羊草の巻物志

一帖 浮城海舟の巻物志

一帖 諸島警方志

三冊 重札目録手摺志

三冊 百人一首手摺志

一帖 東京新聞の巻物志

一帖 東京新聞の巻物志

谷

和漢書籍
東錦繪

問屋

岩板御届

編輯 久保田彦作
東京第天區二小區通二丁目十九番地
大倉孫兵衛



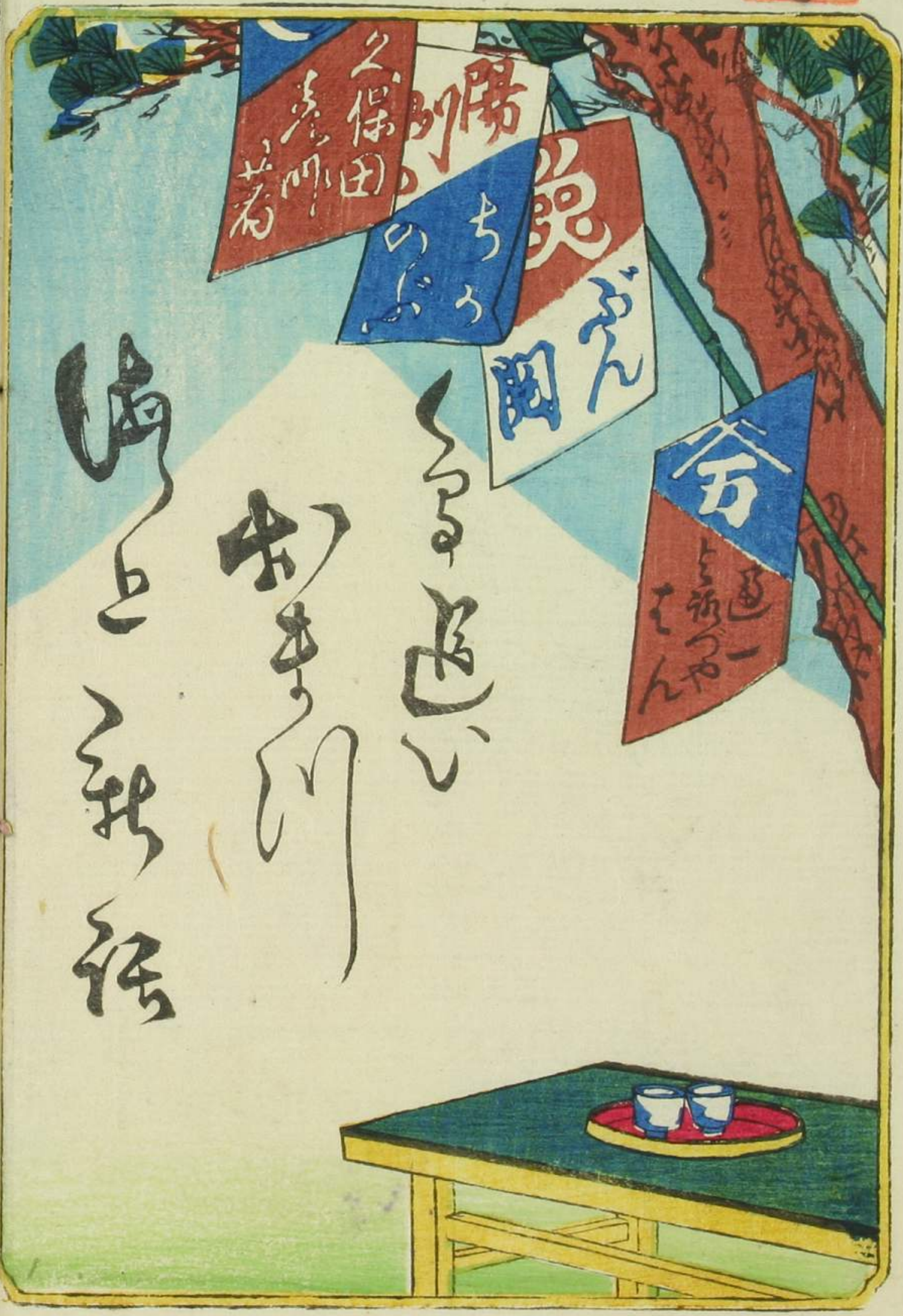


鳥
阿
松
海
上
新
話

阿
松
下

へ14
2688
3

特
へ14
2688
3



海と舟
舟と舟
舟と舟

大蔵



此書は小太郎
が犯せし罪の
次子と縁の
草葉上の
繁昌
金と其の俵
縁にお錠の世

勤め上とも水の泡女も迷つて
暖簾を分て若きま
後でいさぞや父母の
非業の死を遂げ
まる死支度アかり
榎の枝小引りて輪小
結びさけ帯解かど死
証と彼財布小書
を拜と死後の
ますと自家の方
祈り

可
不
可



女子の
声小

あはれ

ひな

声の

ひな

待て

との

待て

との

待て

忠

ふりかり

一者ふ

ひ松の

まを罪をん

しをさふ

とまんせぬが形

さうく安んじやハ

と迄にお覚ぬハ

なほさん絶えぬ

涙を

知り継り月あり

おつくと見詰て

涙を

なほさん絶えぬ

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を

涙を



斗りぞあつた
愛死の身果

由皆を

前世の

約束あつん

死後れつて耶の

たの目ふからぬ

其内ふと覚ぬと

移め称名と口ふと入て眼と

閉帯ふまどうけお務め

既ふ纏まて死みんとせり

確り抱き

振舞ふ手に

下さ

殺して

留ま

らぬ

おる

死を

祈せ

返り

返り

返り

返り

返り

返り

返り

返り

返り



夜の霧あかりの殺し
 甘ぬ私よ共小との小声も
 耳小聲への愛音の夜月小
 透しに教へん世や其方を
 阿茶下 一で忠為
 さん何ら
 おびててよ
 重なる罪由
 祝の舟
 堤で百田を編りらるる
 大坂吉と母さんの詐り
 ごと登へ仮の枕でも



此身も情うけ
 一いふありに
 此身も情うけ
 兼てち治と意ひ
 歩ゆあらぬ
 乃の世の今思
 十日爰彼地と時
 迷ふ旅鳥折と今
 有出逢し日以念
 おの浅草ちの観音
 さあ五利益あらんへ

男女二人が極れ死あが
 女もいふれ一と安と人に
 見らるれ死
 松
 逢うて身を決白と語こ上
 今此世も必出あ死ぬあ
 どのく手とつてせめて未来
 一蓮托生とつて爰の木の枝も
 退れの辻は友抱
 及か各むとも夜あ
 臆める



その風情は又憎
くらぬ新しき死
涙交り小
捲口説
心の底迄
汲兼て
まのちの初めの秘涙
とも思ふにが廻り絶
毒婦がい先き色と含み
真実おえより阿松お遂

其日小
出今
又後で
出逢と
いふも尺
せぬ縁お
てあつらん
ととり六郷
の川へ舟と
投げ



し忠者ぞとどろ
涙小あはし襟えより
吹ひて身由
死神の
體と
致せて
今死ぬの由お忘れ
心へ夫細とる家小お知らぬが今までも恨んで告ぐ我あやまり

死ぬと迄女おの操中
さし連むれ上し其
方の心体忘れ
と忠者の涙の
とをぬおよけり
と身傍をてら阿松お猶廻りかへて侍より
とてはの契りと信びより実の本夫と之ひおま祝と由
捨てお臨と慕ひ爰でたより出逢ひ小おの甲斐由あかむひ
生て済まぬ因果因士死と死ぬのとされね此上どんをる入因小
逢とも縁いとさめいひ死んで死なれが嘆あつと
小唄の文おふよりいへは替らう
捨る命と存生へ存生へ二月二月月
方と世帯と持添ひ遂と
上死ぬとて由得い

其の(ま)旧幕の脱走隊が彼の山
要所より陣と張ると早も東京
安んぶ公編藩の兵隊は同族
縁由山を不たて内戦争の
有り様を物残すを巧
るればお松忠義の二人の者世と思ふ
罪ある身も後悔とあり抑も
錦織と肩(附)う義理橋と寄は人々
お小治さ遠くをなへ更ふ心由安堵せられ
若き女の眉毛ありては活次の仇の悪り
をんとお松い髪不眉毛と利流し髪も結を
草米ね鳴油浴衣の上着てお松髪
田舎婦が物残す

三島
形小らら之函根の裏及大倉沢
の山竹と三島(出)んと案内者と雀ひつ



又歩行
ぬと怒を
醜めて悩め
お松い元

困ト果
僅二日啼おて底豆
踏出し今ハ足由又



三島の
一七辛よて
り忠義と勿
より大膽不汰
なるがら由男猪
も自由なれば
駕籠と雇ひて忠
義と助けをせ
お松もかど小

其の病者云ふの如く見ゆれば
 其の病者云ふの如く見ゆれば
 其の病者云ふの如く見ゆれば
 其の病者云ふの如く見ゆれば



肝腎の路金す之く如
 何いせと流石の毒婦も看後す四
 赤まれは偽小看後の方
 其の病者云ふの如く見ゆれば
 其の病者云ふの如く見ゆれば
 其の病者云ふの如く見ゆれば
 其の病者云ふの如く見ゆれば



床小対してその身は
 括りあはれ奪ひとの身を陰
 心す却つて後の便り由
 心のすふあぬは浮世と
 心す却つて後の便り由
 心のすふあぬは浮世と

浦糸の正木との合右を泊り
 夜より候小身内不登熱は汗由
 烈しき苦悩を不眠に
 捨て由置れぬは



肌小若かけど
 味小觸つた
 平たの重荷小
 用の金と小
 肌小若かけど
 味小觸つた

可

可

阿松の巻 果て夜も
ろく不眠らぬ

自其

身不

腹

とんを

いよ

外見は着座

ふんとい

芳れ振も

合宿の旅舎お松の心

推量して貞女の者云

あはれ日々病人の口お



お松の巻

者なれど

と目も放さ

何れ彼人へ

印さすあり

とやわら

お曲者

筆を吹

旅人の身

一七〇

此家泊

此家泊

此家泊

菓物或は肴をい送りとせ人由あ

必ひよもの

世をわの鬼

これ世の中の人

の心のつわい

と茶をま

ほやりの

三ツの中

宿の旅舎

りてい

小世

可
下



便所

思

暗

く

感

出

風

失

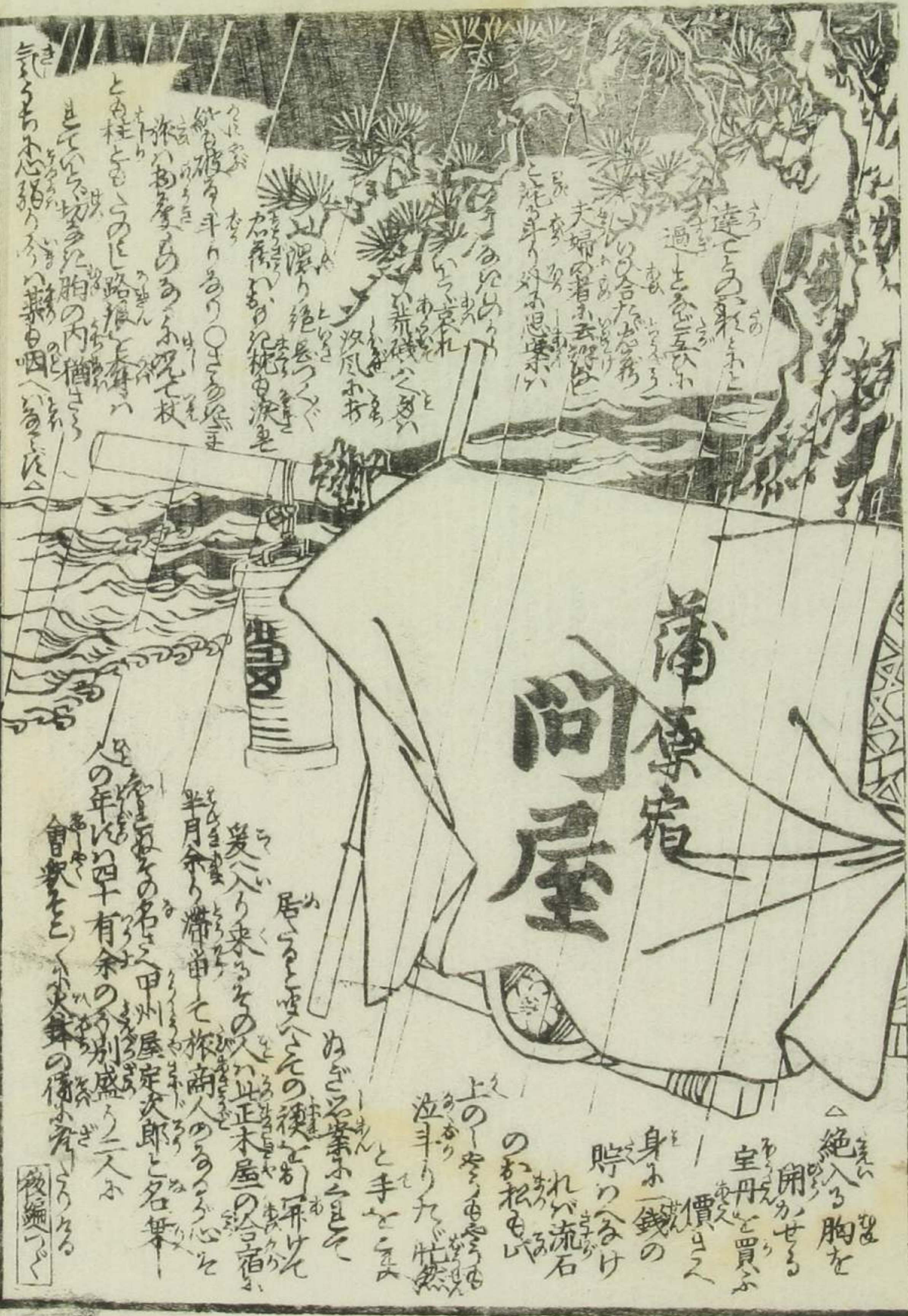
相

り

人

産

あ



田舎源氏五十四条 二帖 東よりきつ彦彦、画情志あり
 大日本物産圖會 五帖 大志、修画、子、皇、女、志あり
 俳優三十六花撰 一帖 千代、穉、歌、子、口、落、画、思
 東京開化卅六景 一帖 芋、お、い、し、新、知、志、あり
 小學入門彩色入 一帖 諸、流、藝、方、志、あり
 尺一寸珍本 一帖 重、礼、日、錦、子、掛、志、あり
 鹿兒島實記一夕話 三冊 百、人、一、昔、手、話、志、あり
 鳥道長変海上新話前 三冊 新、製、紙、流、文、人、画、志、あり
 古今名婦傳 一帖 東京、新、園、子、弟、志、あり

谷 和漢書籍 東錦繪 問屋

編輯 文保田彦作
 東京第天區六小區通二丁目十九番地
 大倉孫兵衛



假名垣魯文關
久保田彦作著
陽州齋周延画

銘
爲
榮
堂
拜



海
上
新
松
迎



14
2688
1-3